

これからの 法座の在り方について考える

～「法座活動に関するアンケート調査」結果報告書～

宗門総合振興計画の事業内容「⑯布教線の拡充等、組単位等による合同法要・法座の実施を進める」のうち、特に「布教線の拡充」について、布教団連合及び教区布教団における対応、対策、及び施策等を協議することを目的に、2018年度に「布教線拡充検討部会」が設置され、これまで「布教使アンケート調査」の実施など、成果物を『布教団通信』（布教団員に配布）へ掲載してまいりました。

このたび、その一環として、2023年10月に組長及び教区布教団を対象に「法座活動に関する調査」を実施いたしました。組長には組内寺院の定期的な法座（毎月または隔月で実施されているもの）について、教区には布教団主催の法座を中心に、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）流行を経た法座開催の現状や工夫、特徴ある事例について尋ねました。

本報告は、このうち組長を対象とした調査結果を取りまとめたものです。文末には調査を実施した「布教線拡充検討部会」での意見や提言を掲載させていただきました。

今回の結果を、ご法座の継続や新たに開催いただくための一助としていただければ幸いです。

1. 「法座活動に関するアンケート調査」の概要

(1) 調査目的と内容

目 的…宗門総合振興計画【重点項目5. お寺にご縁のない方々と共に集える開かれたお寺づくり】の〈事業内容⑯〉において、特に「布教線の拡充を推進する」ため設置された布教線拡充検討部会のもと、これからの法座開催の在り方を検討する基礎資料を得ることを目的とする。

調査内容…①定例法座、月例法座の現状について

②これからの法座の在り方に関して

③常例線布教の認知度と活用について

④宗派支援制度の認知度と活用について

(2) 調査対象及び方法

調査対象…522組（2023年10月1日現在、組長に依頼）

調査方法…郵送法にて実施、回収は郵送、オンライン回答を併用（QRコード）

※「調査票」及び「組内調査補助資料」（必要に応じて参考）を郵送

(3) 調査基準日

2023年10月1日

(4) 調査回収数と回収率

返信数…郵送回答192票、オンライン回答85票、

合計277票（無効票数…0票）

有効票数…277票（分析対象の調査票）

回収率…53・1%（内、オンライン回答30・7%）

(5) 調査主体

浄土真宗本願寺派 布教線拡充検討部会（僧侶養成部・布教使担当）

(6) 調査分析 舟橋和夫（龍谷大学名誉教授）

(7) 調査統計分析結果

調査統計分析結果（数値、縦棒グラフ、記述回答の抜粋）については、下記QRコードよりPDFデータをダウンロードしてください。



2. 「調査結果の見方」について

・これからの法座開催の在り方を検討する基礎資料を得ることを目的に、新型コロナウイルス流行以降の定例法座、月例法座の実施寺院数、現在開催されている法座での工夫（開催方法、実施時間、案内、内容）や新たな取り組み事例、また常例線布教（定例法座、月例法座を複数寺院にて実施）の認知度・効果などを組長に伺いました。

・集団としての特性を把握するために連区別に調査統計分

析を実施。データの表現は数値とともに縦棒グラフで表現しています。

・回答のNADKとは、未回答、知らない、など欠損値のことです。

3. 「分析結果から見た現状と課題」について

(※調査内容①↓③↓④↓②の順で掲載しています。)

調査内容①…定例法座、月例法座の現状について

●定例法座を実施している寺院の割合は36・3%

・Q1で「現在、定例法座、月例法座を実施している寺院数」は1955カ寺。今回、回答のあった組長が所属する、組の寺院数の総計が5382カ寺であることから、実施している寺院の割合は36・3%となった。

●定例法座、月例法座の実施率は減少傾向

・「第11回宗勢基本調査」(2021年7月1日調査基準日、回収率70・2%)では新型コロナウイルス流行以前の実施率は58・8%。今回のアンケート(2023年10月1日調査基準日)では、新型コロナウイルス流行以降の実施率は36・3%と、22・5ポイントのマイナスという結果であった。新型コロナウイルス流行以降、定例法座の実施は減少していると見られる。ただし、調査対象(今回は組長を対象)と方法が異なることにも注意が必要である。

●いわゆる「内勤め」の定例法座が半数以上

・Q1・2、定例法座を実施している寺院のうち、主に住職または寺院に所属する僧侶が講師を務めている、いわゆる「内勤め」による法座で実施している寺院は55・4%という結果であった。特に、第3、第5連区はその割合が高く、一方、第1、第4連区については外部講師に依頼する傾向が高いことがうかがえた。新型コロナウイルス流行前と比較するデータはないが、おそらく「内勤め」の割合は増加傾向にあると思われる。

●法座をやめたい理由は「参拝者の減少」が半数

・Q1で法座を実施していると回答のあった寺院1955カ寺のうち、Q2で「法座をやめたい」と考えている寺院は104カ寺(5・3%)。圧倒的に多かった回答は「参拝者の減少」で、記述回答のうちおよそ半数以上(回答55件中31件)に見受けられた。「参拝者の減少」と連動する形で、「門徒の高齢化」、「若者がこない」など門徒の状況変化や経済的理由、「寺院内の人手不足」、「住職の高齢化」など、寺院、寺族の体力を理由にあげる回答も少なからず見受けられた。

●法座を実施したいが「兼職で時間がとれない」、「参拝者の減少」が多数

・一方、Q3では、「法座を実施したい」と考えている寺院は351カ寺(6・5%)。実施に至っていない理由につい

ては、「兼職で時間がとれない」が3割以上に含まれ（回答116件中40件）、退職後に実施を考えている寺院も見られる。

・新型コロナウイルス流行以降に再開を試みている寺院も多いが、「参拝者の減少」や「門信徒の高齢化」などが連動し、「講師費が見込めない」と再開に躊躇している回答が少なからず見受けられる。これは門徒の家での法義相続が大きく関わっているものと思われる。

調査内容③…常例線布教の認知度と活用について

●「常例線布教」の認知度は67・9%、実施組では「多くの布教使の話が聞ける」と評価

・Q6で「常例線布教」の認知度について尋ねたところ、67・9%という結果であった。常例線布教とは、布教団連合では1線5カ寺以上が連続して開催する定期的な法座を指す。講師交通費を複数寺院で負担できるため、遠方の講師も招聘しやすくなる開催方法といえる。

・Q7では「常例線布教」の有無と実施の感想について尋ねた。「実施している（組を超えて行っているを含む）」53組（19・1%）のうち43組は「とても有益」、「有益」と評価。特に「（年間を通して）多くの布教使の話が聞ける」の回答が多く、「講師の選定が楽」、「少ない予算で開催できる」など負担軽減を理由にあげる回答も少なからずあった。

た。一方、課題として「講師の質」、「聴聞されるご門徒の固定化」、「定期的な法座活動の困難さ」などがあげられる。

●「実施したいと思わない」主な理由は、「自主性・自由性の尊重」「連携が難しい」「開催自体が困難」

・Q7-4で「実施してみたいか」という問いに対し、「実施したいと思わない」は29・4%。「それぞれの考え方がある」、「法座日程が決まっている」など、各寺の自主性、自由性を尊重したいとの回答が少なからずあった。

「日程調整が難しい」、「他寺院の賛同が得られない」など寺院同士の連携が難しいことを指摘する回答と関連しているのではないか。また、「参拝が少ない」、「熱意のある寺院が少ない」など開催自体に困難性を指摘する回答も目立つ。その他、「余裕がない」、「住職が兼務」、「組の活動が多数あり新規事業ができない」などで「実施できない」との回答があった。住職の勤務形態やマンパワー不足が主な原因としてあげられる。

●最も多い回答は「なんともいえない」

・「なんともいえない」は最も多い回答となった（58・4%）。「過疎」、「高齢化」、「交通手段」、「法務で手一杯」など常例線布教の開催が困難であるとの回答が多かった。

・「実施したいと思わない」回答者と同じく、「寺院の距離が離れている」、「日程調整が難しい」など寺院間の連携

を理由とする回答や、「5カ寺以上の連携は現実的ではない」など常例線布教を行う上で必要な「5カ寺」以上の連携を課題にあげる回答もあった。

・また、「組内で話題にあがったことはない」、「組内で議論する必要がある」など組内で検討が必要といった回答も目立つ。常例線布教が組内の会議体で議題にあがってこなかったことが一番の要因かと思われる。関連して常例線布教自体の認知度がないことを問題視する回答も少なからず見受けられた。

●活用に向けて共通した意見

・常例線布教の今後について自由記述をした結果、「実施したい」、「実施したいと思わない」、「なんともいえない」に共通することとして、次の回答があげられる。

✓組内や近隣地域寺院との連携・寺院間の連携をどう促していくか

✓法座の日程調整・住職の勤労状態や各寺院のマンパ

ワーなどをすりあわせる必要がある

✓法座の参拝者増加への工夫

✓常例線布教の認知度向上のための告知の工夫

調査内容④・寺院振興金庫の認知度と活用について

●「寺院振興金庫」の認知度は55・6%、「活用を勧めたい」人は22・7%

・Q8では寺院振興金庫の認知度を尋ね、「知っている」との回答は55・6%。Q9では「(組内寺院に)活用を勧めたいか」をうかがったところ、「いいえ」、「わからない」が合わせて75・1%という結果であった。

●小規模寺院が法座を行うのに有効、もっと認知度をあげべき

・勧めたい理由については、「法要が勤められない寺院がある」、「住職不在の寺院がある」、「制度を利用して法座の機会を増やすよう働きかけている」など、小規模寺院にとっても法座を行う上での一助になることが指摘される。また有効であるにも関わらず、組や近隣寺院への認知度の低さが指摘される。特に、この制度自体を前向きに捉える回答者に多い傾向がみられる。

●「必要性を感じない」と、「条件にはあてはまらないが状況は厳しい」で二分

・「いいえ」と「わからない」を選択した人の傾向として、「必要性を感じない」、「困難な状況にはない」、「助成制度を活用したいという声があがってこない」、など各寺院の判断や各寺院の事情を考慮した回答も多い。また、

助成の条件に当てはまらないが、法座を実施、継続する上で参拝者を集めるのが困難（過疎、高齢化）、また後継者が定まらない寺院が多くあるなど、寺院を取り巻く環境変化の問題をあげ、手続きや条件の簡略化、助成金額の低さを指摘する意見も見られた。

調査内容②…これからの法座の在り方に関して

●主体的な参加を促すような工夫が見受けられる

・Q4では「現在開催されている法座について、特に工夫がみられる事例（開催方法、実施時間、案内、内容など）」について回答をいただいた。開催時間や案内などについては、誰に来てもらいたいか、対象の選定に大きく関与することがわかった。そこで、ここでは誰を対象にしているのかという観点でこれまでお寺にご縁のある方への工夫と、これまでお寺にご縁のない方への工夫の2つに分類すると、これまでお寺にご縁があるかないか対象に応じた工夫が行われている。全体を俯瞰すると、主体的な参加を促すような工夫が見受けられた。

〈これまでお寺にご縁のある方への工夫〉

✓ 暁天講座（早朝法話会）の継続（50年余）。門徒衆が主体となり、実施している門信徒会講座（60年余、組が主体となり継続的に実施）。

✓ 高齢者の体調を考慮して、勤行は30分以内、法話は1時間以内に取りめている。／高齢者が多くなってきたため、足下の明るい昼間に開催。平日はお勤めの方が多いので、週末に実施する。

✓ メール、LINE、寺報、手紙・葉書等による個別案内。／案内状を地区毎に総代さん（班長さん）より案内（お誘い）。／定例法座の連絡係を作っている。／興味を引く写真などを取り入れた案内状の作成。

✓ バスによる参詣者の送迎。休憩時のお菓子を全国から取り寄せている。

✓ 参加者アンケートや教化団体の意見をもとにテーマや内容を決めている。／法話だけではなく、総代さんの感話やケアマネジャー・栄養士さんなどによる、健康に関する話などを加えている。

✓ 法話中の質問、言葉のやりとりができるようにしている。／話し合い法座を多く採用している。机、イスは講義形式であっても、ふだんからの話し合い形式を多用することによって、自由に質問が増えれば、工夫としては成功であると考えられよう。

✓ 最後にお茶を飲みながら講師を交えての茶話会で雑談時間を設け、仏事に関してさまざまな話を気軽にできる雰囲気を作っている。／終了後、法話の内容をプリントして配布する。

✓新型コロナ流行前までは毎月の法座をしていたが、今では毎月LINE又はEメール、ショートメッセージで法話を送信している。

〈これまでお寺にご縁のない方〉を意識した工夫

✓勤行・法話の後に寺ヨガをはじめた。法話のみでなく、参加したいと思う内容を取り入れている（例／料理教室、菓子づくり、手芸教室等）。／認知症の家族の方と一緒に近くの大学生と勉強会をしている。

✓開会と閉会の時間明記。／時間を短くしている。

✓さまざまな立場の方が参加しやすいように、毎月、平日の午前と土曜日の午後、二度の法座を開催。／同じ内容の法座を、昼と夜と2回開催し、都合の良い方に来ていただいている。／年に12座皆出席の方には記念品を贈呈している。

✓以前は開催日を固定していたが、ご家族も参加しやすいように第4土曜日の午後にした。／毎月、第1日曜日の午前中に「日曜礼拝」を行い、家族での参詣を促している。

✓ホームページ、ブログ／新聞折込に案内チラシ／地域の行事と重ならないようにしている。

✓花まつり・初参式・米寿の集いなどの行事と法座を合わせ、親しみやすい話は住職がする一方、教学の話は外部講師にお願いしている。

✓月例法座ではないが、自宅へのお参りが難しい方に寺院での盆法要日を複数設け、案内している。／新しい住民には報恩講という言葉聞いたことがない人も多く、従来の時期と方法では集まらないので、春秋の彼岸に変更し報恩講を実施。

✓定例ではなく門徒外対象の法話会を開催している（毎年30団体50名以上）。／興味を持っていただけそうなたテーマや形式を工夫している。

✓「15歳で育つ寺子屋わっぱ塾」（平成8年から月4回毎週木曜日）。／花屋に集まる方々と「ほっこり井戸端会議」（毎週水曜日9時～12時）、親子が主体的に参加する経験を通じて大切なつながりに気づくコミュニケーションの場を展開している。

●参加を増やす方法として、個人参加型と家族参加型がみられる

・これまでお寺にご縁のない方へのアプローチとして、「ヨガ」、「料理教室」、「菓子づくり」、「手芸教室」、「ケアマネージャー・栄養士さんなどによる健康に関する話」など興味関心ごとから個人へ参加を促す事例。また、「日曜礼拝」のほか、「花まつり」、「初参式」、「米寿の集い」など、定期的また人生の節目を機縁に家族への参加を呼びかける事例がみられた。価値観や嗜好の多様化が進み、家族の絆は意識的に育む時代にあって、これ

らの事例は法座への参加頻度を高めるための工夫とみられる。

●外部講師（布教使）に求められることは何か

・Q112では、いわゆる「内勤め」法座が半数以上という結果であったが、状況が好転すれば布教使の出向する余地があると考えすることはできないか。いわゆる「内勤め」の法座の良さと外部講師に求められていることが合致すれば、「親しみやすい話は住職がする一方、教学の話は外部講師にお願いしている」との回答は参考となるのではないか。

●新型コロナウイルス流行を機に高齢化が顕著に、あらたな法座のありようが考えられている

・Q5では「これからの法座開催にあたり、取り組みたいこと及び課題」について伺った。「新型コロナウイルス流行以前と同じ形態に戻したい」と願う寺院はかなり多い。特に「お斎」など会食関係の記述が目立つ。新型コロナウイルス流行以後も「時間短縮」が引き続き継続している模様。
・門徒の高齢化問題が顕著に多い。高齢化に伴う問題として、「参拝者減少」「移動手段」「経費」が関与しているケースも目立つ。

・新たに取り組みたいこととして、「ご門徒に司会をしていただくなど、門徒主体の法座」、「初めてのの方の参拝、若年層を意識したイベント（キッチンカーや現代の人が受

け入れやすいもの」、「土日開催（朝9時から約1時間）」、告知（ホームページ、SNSの活用）、伝え方の工夫（オンライン開催、パワーポイントなど視聴覚教材の使用）といった対象を意識した記述も多い。寺院一カ寺あたりの体力面から、組内寺院の連携が必要との記述が多い。
・再開には「エネルギーが必要」と、新型コロナウイルス流行前に戻すことにまだ課題が山積している寺院も少なからず見受けられる。

4. まとめ

〈定例法座、月例法座の現状について〉

新型コロナウイルス流行以降、定例法座、月例法座の実施率は減少傾向にあることがわかりました。

定例法座を「やめたいと考えている寺院」、また「実施したいが実施に至っていない寺院」ともに「参拝者の減少」をその理由に挙げています。日本が人口減少社会に入り、その影響が幅広く少しずつ表出しているようです。

今後、人口減少・高齢化と連動して「参拝者の減少」が急速に進むと、「講師費が見込めない」ため、講師を招聘しない、いわゆる「内勤め」の法座の割合がさらに高くなると推測されます。「これまでお寺にご縁のある方」にとどまらず、地域住民など「これまでお寺にご縁のなかった方」

にもご縁を広げるような取り組みが期待されます。

〈常例線布教の認知度と活用について〉

「常例線布教」の認知度は67・9%でありました。実施組においては「(年間を通して)多くの布教使の話が聞ける」など8割以上が有益だと評価しています。一方、「実施してみたか」という問いには、「なんともいえない」との回答が一番多く、「組内で話題にあがったことはない」という意見も多くありました。法座開催の負担軽減が期待される「常例線布教」については、相互扶助の観点から組内で話題にしていただきたいです。

〈宗派支援制度の認知度と活用について〉

「法座活動の支援」(「寺院振興金庫」助成制度)の認知度は55・6%でありました。「小規模寺院が法座を行うのに有効なので、もっと認知度をあげるべき」との評価もある一方、「助成制度を活用したいという声があがってこない」ため「わからない」との声が多い結果となりました。常例線布教と同様に組内での話題にあがることを期待したいです。

〈これからの法座の在り方に関して〉

現在開催されている法座には、主體的な参加を促すような工夫、受け手目線を意識した工夫、がみられました。法座に参加いただく方を意識していくことが大切であるとのメッセージと受け取ることができます。これまでお寺

にご縁のなかった方々に継続して参加いただくには、新しい仲間を受け入れる雰囲気がある、かどうかも重要なポイントになると思われます。

〈最後に〉

日本が人口減少社会に入り、定例法座の開催にその影響が幅広く表出している一方、「新型コロナウイルス流行以前と同じ形態に戻したい」と願う寺院はかなり多いことがわかりました。この調査結果から、将来の望ましい姿や、目標とする具体的な数字や行動、を作成いただくなど、お寺の関係者で話し合っていただきかけとなりましたら幸いです。

最後となりましたが、本調査にご協力いただきました組長(当時)の皆さまに感謝を申し上げます。

布教線拡充検討部会では、2020年に「布教線拡充に資する提言」を作成し、定例法座(常例法座)及び常例線布教に関して提言を行っておりますので、該当箇所を抜粋し共有いたします。

提言2「常例線布教・常例法座について」

(1)点を増やすことで線につなげていく――

ここ数年では、1線5カ寺以上になる常例線布教の本数

や、会所の数が減りつつあることが教区から報告されている。常例線布教は、若手布教使の研鑽の場、ご教化の場であり、線になっていることで会所にとっては出向講師の交通費等の負担軽減となっている。しかし常例線の無い教区もあるので、線への取り組みの前にまずは各寺院に対し常例布教（法座）開設または継続を奨励し、点を増やすことから線につなげていくことが現実的であると考えられる。

常例布教（法座）の開設に参詣者の多い少ないは全く問題ではない。たとえ一人の参詣であつても尊い法縁である。継続した聴聞によつて、住職、寺族、門信徒ともども如来のお育てによる人生を歩むことができる。如来より届けられている念仏の救いは「誰もが同じように救われる」安心感であり、これまで浄土真宗とのご縁が無かった方々や無宗教と語る方々、そして他宗旨の方々と共に聴聞しつつ、ご縁が結ばれ広がる大きな機縁となる。まずは寺院であれ、家庭法座また外部施設であれ、一座でも多く法座開設に向けて努力を惜しまないことが必要である。

浄土真宗寺院の存在意義は何であるか。住職、寺族が深く宗祖の開顕されたご法義を学びつつの寺院活動推進でなければならぬ。社会からは何宗の寺院であつても葬儀、法要、供養寺院、また祈願寺院等と映っていることを真摯に受け止めなければならない。

各寺院の置かれている外部環境は厳しい状況にあるとは

いえ、社会に向けて広くご縁を結ぶには継続的な常例法座の開設が必要不可欠であり、さらに近隣寺院との共同開座である常例線へと展開されることがその法座継続のためにも肝要である。

(2) 法座開設の意義・認知度アップ

当流は聞法の宗旨といわれるように、法座の開設が最重要活動である。聞法を通して如来より大きな安心感を賜うご縁となる法座の開設は、住職や寺族ならびに門信徒はもちろんのこと、今まで浄土真宗とご縁がなかった方々とも広くご縁を結ぶ契機として意義がある。

参詣者にとっては、住職よりも寺族の方が日々の不安や疑問などを率直に話しやすい場合もあり、共に聞法を重ねながら互いの関係や信頼を深めていくことが望まれる。そのためにも、寺族にあつては法座の準備や参詣者、講師の接待などで忙しいことではあるが、自らが「自信教人信」の実践と念仏者の生き方を表すため、まずは住職と寺族が聴聞をすべきであり、その延長線上に参詣の皆さまと共に仏法を喜ぶことが本来の聞法道場の姿ではないだろうか。

一つ一つの小さなご縁の積み重ねが、門信徒はもとより広く多くの方々に地域における寺院の存在意義と認知され、将来的に寺院が必要とされ続けることにつながる

と思われる。

「布教線拡充に資する提言」(『布教団通信』第43号掲載)：下記QRコードよりPDFデータをダウンロードすることができます。



布教線拡充検討部会では、このたび、さらに、「ご法座の減少をどう食い止めていくか」について以下の通り提案がありました。

布教線・常例線の考え方について

これから先の寺院の形態を考えると、従来の法座形式を柔軟に考えなければならぬと思われる。

(1) 線を面として開催する法座

例えば5カ寺がオンラインでリアルタイムに開催する。1カ寺に講師が入り、4カ寺がオンラインでつながる。講師はつながった寺の門徒とも会話をする。次回は残りの中の1カ寺に講師が入り、5回で一巡する。講師選定・予算の問題などを解決する方向性が考えられる。寺院法座だけでなく、地域法座(各地にある法座会)の連携にも使える。

(2) 法座の形態を考える

演台からお話するだけが法話ではない。あるところでは門

徒と講師・住職・坊守が円座となり法座が進められている。また、あるところでは、法座は原則午前で開催し、法座後「おとな食堂」を開き、住職・坊守、また時間があれば講師も同席して昼食をいただく。高齢化で一人暮らしの方々が増え、一緒に楽しく食事をするのがコミュニケーションを深めることになる。

以上、これからの法座の在り方について、アンケート調査結果から得られたこと、また布教線拡充検討部会における提言・提案を共有させていただきました。日本の人口が減少する中にあって、各寺、各組内で連携しながらご法座が企画されることを期し、報告を終えさせていただきます。

僧侶養成部〈布教使担当〉